

優秀賞

同じ目線で、ともに

愛媛県立松山南高等学校3年 竹林 和奏

「先生が全てを教えてくれる」そんな私の考えが大きく変わったのは、私が高校1年生だったときだ。部活動を通して、1人の先生と深く関わったことがきっかけだった。

私は弦楽部に所属している。中学校までは吹奏楽部に所属していたが、弦楽器は高校から始めた完全な初心者だった。同級生の全員が初心者で、入部当初は毎日手探りで音を出し、先輩のご指導を取りこぼすことなく吸収することに必死な毎日を送っていた。

そんな私たちの顧問は、物理の先生だった。音楽の先生では無いため指揮のプロではないし、ましてや弦楽器の経験も全くない。中学生のときに所属していた吹奏楽部では、先生が吹き方や表現のつけ方を全て教えてくださっていたため、物理の先生と聞いて正直不安も小さくなかった。けれど先生は、自分が初心者だからといって指導を放棄することは決してなかった。むしろその逆で、楽譜を読み込んだり、曲の背景を調べたり、指揮の仕方を研究したりと、私たちのためにできることを増やそうと力を尽くしてくださった。

技術的なことは、先輩や月に2回ほど来てくださる外部の先生、お互いから学ぶしかなかった。けれど先生は、技術以外の面で多くのサポートをしてくださった。ある日の合奏中、「この場面に何かイメージをつけてみよう。」と先生がおっしゃった。曲にイメージをつけて演奏するということに最初はピンとこなかったが、例えば失恋して号泣であったり、森林を伐採する様子であったりなどの具体的なイメージを全員で統一して演奏してみると、一気に曲がまとまり、自分たちのしたい演奏に近づいた感じがした。音楽に対してイメージをもつことや、聴いている人の心に何を届けたいかを考えることなど、技術面の指導ができない代わりに、そうした‘表現’の部分を先生と一緒に考えてくださった。私たちの演奏に、想いを乗せる手助けをしてくださったのだ。

私たちは県大会で、芥川也寸志の「トリプティーク」という難曲に挑戦することになった。合奏中に止まってしまったり、音がそろわなかったりして、不安が尽きない日々が続いた。正直、「この曲は今の私には無理かもしれない」と何度も思った。けれど、私たち1年生がそうやって心折れるたびに先生は私たちの前に立ち、「一緒にやろう！頑張ろう！先輩みたいに弾けるようになろう！」と指揮棒を振り続けてくださった。先生は、自分自身もわからない部分があっても、それを隠さずに私たちと一緒に悩み、考え、ぶつかってくださった。休日にも時間をつくり、私たちの演奏が少しでもしやすくなるようにと、指揮のタイミングや動きを工夫してくださった。その姿に私たちは何度も救われたし、自分も頑張らないといけないと思うことができた。

そして迎えた県大会の本番、私たちは今までで1番いいと思える演奏ができた。そして全国大会の切符を手に

することができた。演奏を終えたあと舞台袖で、先生が嬉しそうに拍手してくださった姿が今でも忘れられない。先生がいなければきっとここまで来ることはできなかった。

教師はすべてを教えられる必要はないのだと、この経験を通して感じた。生徒と本気で向き合い、わからないことは隠さずに私たちと一緒に考え、支え合い、励まし合うそんな姿勢が、私たち生徒にとってどれだけ心強いのか、力になるか計り知れない。先生のような人が一緒になって本気になってくださったからこそ、私はあのとき、自分を信じて前に進み続けることができたのだと思う。

高校3年生になった。私は弦楽部部長だ。1年生のときの先生と一緒にあって同じところを目指した経験は、後輩を教える時に生かされていると感じる。部の1番上に立つ人間として、今度は私が後輩と同じ目線で戦っていきたい。そして、「人としての存在」の大切さや魅力を、もっと伝えていきたい。

この大切な経験を通して、私は教師という職業に対して強い憧れをもつようになった。誰かに何かを一方的に教えるというよりも、一緒に悩み、一緒に考え、一緒に笑える大人になりたい。何か困難なことがあっても、一緒に解決策を探しながら、同じ目線で戦いたい。私にとって教師の魅力とは、まさに「共に走ってくれる存在」であるということだ。私はそんな顧問の先生のような大人になりたい。

だから私は教師を目指す。